

もくじ 囚人墓地のその後 1P 千葉さなについて 2P
近郊の農産物 しめ飾り⑦ 3P お知らせコーナー 4P

足立史談

第506号

2010年4月15日
足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
<22-308>

囚人墓地のその後

高野恒幸

『足立史談』第45号（昭和46・1971年11月発行）には「囚人墓地の移転」についての記事が掲載されています。それによると、「一日之出町清亮寺（住職小林見諦師）の、東武線で分断された東側墓地に囚人墓地があったが、東武線の複々線化工事で立退くことになり、去る10月28日、墓地の管理者である東京拘置

所、工事施工者の東武鉄道、ならびに建設工事関係者、足立史談会有志らが30人ほど集まって移転のための法要を行った。

なお、この墓碑等は11月1日に解体し、雑司ヶ谷霊園に送られた」と記されています。

この墓碑については、瀧善成氏が『足立史談』第41号に「清亮寺の墓碑（下ノ二）」として、詳しく発表されています。この囚人墓地は雑司ヶ谷墓地に移転をしましたが、法務省管轄



上：遺骨を安置する合葬之碑（同）
下：由来碑（高野恒幸氏撮影）



によってフェンスで囲われた墓碑は拝見できない場所にありました。
この度、高野恒幸氏から貴重な写真と記事をいただいたので「囚人墓地のその後」と題して掲載します。
(足立史談会)

雑司ヶ谷霊園管理事務所北側に、フェンスに囲まれ訪れる人も無い墓地があります。此処は現在東京拘置所管理地として、明治12（1879）年以来、都内各集治監・監獄・刑務所に在所中に死亡し、引取り人の無い遺骨五千体余りが埋葬されていた場所でした。都電よりの道を西に墓地が途切れた箇所に、鉄扉を開けると、さらに東京拘置所と書かれた門扉があり、左側沿いに先ず地蔵尊立像とその由来碑、供養碑や更生保護施設在所中に

死亡し引取り人の無い遺骨を安置した墓石などが並んでいます。

正面には昭和63（1988）年2月建立の由来碑が、その後には平屋コンクリート造り二〇坪程の倉庫風の納骨堂があります。出入りは西側から窓の無い建物です。祭壇は50センチほど高く、中央には合葬之碑と刻まれた自然石が建てられ、その地盤には収集した遺骨が安置されています。

毎年7月の盆法会が教誨師を導師として行われ、また、春秋彼岸には墓前にて法要が営まれております。納骨堂の南には明治・大正・昭和期の集治監・監獄・刑務所の合葬碑4基が在り、獄死や刑死した死亡者数が彫り記されています。

由来碑

この納骨堂は、当所管墓地七千七百五十万平方メートルの南西部七千七百平方メートルを東京都豊島区に割譲、集約整備するに当たり建立されたものである。

この墓地には、東京拘置所、府中刑務所、及び既に廃庁となった小菅刑務所、中野刑務所、並にこれら施設の前身である東京集治監、東京監獄、巣鴨監獄、小菅監獄、市谷監獄、豊多摩監獄、市谷刑務所、巣鴨刑務所、豊多摩刑務所に在所中死亡し、引取り人の無い者の遺骨五千余体が埋葬されていた。

この度、これらを隈無く収集し、一堂に納めて改葬し、永くその霊を弔うとともに、点在した施設ごとの合葬碑、供養碑及び地蔵尊は堂周辺に寄せて祀り、墓地中央に在った、合葬之碑はこれを堂内に安置し、歴史の証とするものである。

昭和六十三年 二月

東京拘置所長 堀 雄一

(足立史談会会員・千住河原町自治会会長)

千葉さな

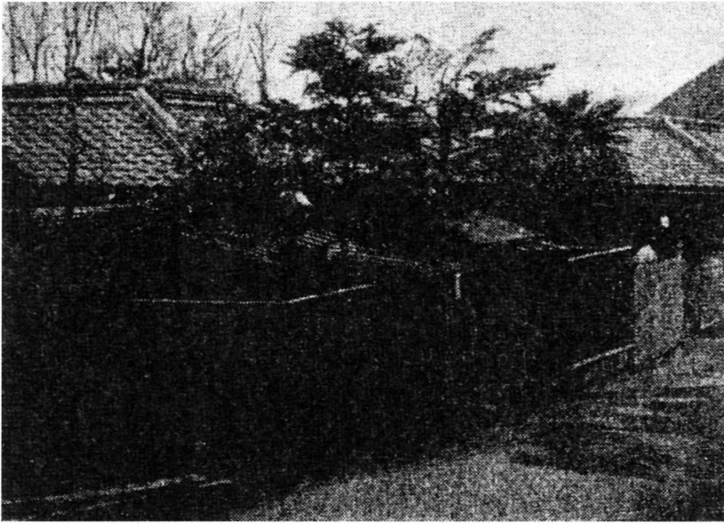
あざくら ゆづ

坂本龍馬の許婚(いいなづけ)として、今では大河ドラマ「龍馬伝」で有名になった千葉さなの晩年は千住だった。これは「足立史談」二十四号、および三九九号でも触れられているが、千葉さなの千葉家とはどういう家だったのか？兄弟は？等々、意外と正確に紹介されている文献は少ない。今回は簡略的に千葉さな家について述べてみたい。

■千葉定吉家 千葉さなは除籍謄本から「千葉定吉二女」と記されている。

千葉定吉は鳥取藩に提出された「身上調書」によると、当時無宿浪人だった千葉忠左衛門の三男で、寛政九年(一七九七)に生まれている。長兄が岡部藩士へ養子入りしたことで人別を得て、次兄の千葉周作ともども江戸入りをしている。千葉周作は日本橋を経て神田お玉ヶ池(現千代田区東松下町)に剣術道場「玄武館」を構え、定吉は当時日本橋新材木町に居を構え、兄周作が創始した北辰一刀流剣術の高弟として過ごしていた。

天保以降に定吉は居を鍛冶橋御門外狩野探測屋敷(現中央区八重洲二)に移し、道場を設け、この地で兄周作より独立して、剣術、および長刀を教えていたようだ。嘉永六年(一八五三)に坂本龍馬が初めてこの千葉道場へ入門した際はこちらの道場で稽古をしている。この年の四月に千葉定吉は鳥取藩に召抱えられている。



「さなが住んでいたころの千葉針灸院」
(明治40年ごろの撮影・「東京近郊名所図会」より)

この後、安政二年(一八五五)の震災により発生した火災で狩野屋敷が類焼したことから居を桶町に移し、明治四年(一八七一)まで同地に約百坪ほどの敷地に道場を設けていた。このときの家族構成は千葉定吉を筆頭に母タキ、長男重太郎、長女梅尾、二女乙女(さな)、三女りき、四女きく、五女しんの八人構成だった。

■当時の評判 話をさなに戻すと、さなの長刀は、姉梅尾から習ったものだ。その素質は父譲りだったようで、早くもその技量は各方面で有名になっていたようだ。そのため宇和

鳥藩への奉公や、高松藩藩邸への出張稽古を行い、対戦相手に対し、連戦連勝していたという。

坂本龍馬のエピソードはあくまでもさなの伝承であり、確証めいたものは存在しないが、唯一龍馬が姉、乙女宛に届けた手紙にさなのことが述べられている。

もし、さなが坂本龍馬と会った最後はいつかとすれば文久二年(一八六二)となるであろう。ただし龍馬は脱藩して国事に奔走している状況なので逢瀬のようなことはなかったといえよう。

そして慶応四年(一八六八)に入り、龍馬の訃報が告げられるとさなは自害を試みたという。しかし父に止められ、諦めている。

この後、明治四年(一八七一)に千葉重太郎が鳥取県へ出仕することになり、このときに桶町の自宅を千葉周作の庶子、千葉東一郎へ譲り、さなも貯えがあったことから横浜に移り住んで長屋を購入して家賃生活を送っていたという。

■灸治と晩年 明治九年(一八七六)ごろにトラブルがあり、長屋を手放して、かつて千葉家に奉公していた川崎の徳兵衛宅に厄介になつていった。その際、父から伝授されていた徳川斉昭直伝の灸治を始めたところ、評判となり、このころから灸治療を始めたようだ。

明治十六年(一八八三)、兄重太郎(このころは改名した一胤という)が京都府へ出仕することとなり、さなも一緒に京都へ行き、灸治を行っている。ここでもさなの灸治は評判を呼んだという。

明治十八年(一八八五)、兄重太郎が死去すると、東京へ戻り、翌年に千住中組七十番地の屋敷を借りてここに灸治院を開業した。

明治二十一年(一八八七)、足立郡役所を建築する際、灸治院の敷地も対象となり、こ

こで一念発起し、千住中組九百九十三番地(現千住仲町一番地辺)に治療所を新築した。

この灸治院は評判を聞いた各人が、是非にと、さなの灸治を受けに来ており、おかげでかなりの繁昌をしたという。

ただ好調な経済事情とはうらはらに、さなの家庭環境はとても良いとはいえなかった。独身だったため、家督者争いが絶えず、ようやく養子に迎えた勇太郎も明治二十八年(一八九五)に二十六歳の若さで病死してしまつた。また翌年には強盗未遂事件なども発生し、とてもおだやかな晩年とはいえないものだったようだ。

その明治二十九年(一八九六)十月十五日、千葉さなは五十九歳でこの世を去つた。死去の後には千葉重太郎の三男、正(まさし)を死後養子に迎えたが、この正も明治三十五年(一九〇二)に病没したため、官職を退いた千葉重太郎の養子、千葉東(つかね)がさなの灸治院を継ぎ、区画整理のために仲町二十九番地(現仲町三)に移つた戦後も千葉家は代々灸治院を受継ぎ、昭和五十年代まで存在していたという。

注1) 千葉さなの漢字だが、戸籍はかな文字で記され、位牌には「佐奈」とされている(千葉重太郎の子孫である弘氏の教示による)。

注2) 二月十三日付に朝日新聞紙上に掲載された「千葉さな」と称す錦絵だが、あれはさなではなく、千葉周作の孫、千葉之胤の妹、貞(てい)であり、発見者の宮川禎一氏にもご了解いただいていることを附記する。また、宮川氏を介して除籍謄本のコピーを譲っていただいた阿井景子氏に感謝する。

しめ飾り ⑦

荻原 ちとせ

■**伝播を考える** 東京東郊でしめ飾りづくりを行っていた集落として、三十三か所ほど紹介したが、これらの集落のなかには、比較的新しいものも含まれている。そのような新しい産地のしめ飾りづくりの様子は、この地域のしめ飾りづくりの起源を考えるにあたって参考になると思われる。

■**飯塚のしめ飾りづくり** 葛飾区飯塚では、葛飾区堀切から教わって始めたという伝承がある。昭和四年生まれの人の母親がしめ飾りづくりを行っていた堀切の家から飯塚に嫁いだ人で、その縁故によって昭和十二、三年ころから飯塚でしめ飾りづくりが始まったという。それまで飯塚では、多くの家が副業として足踏み式縄ない機を使った縄づくりと、中川の葦を使ったヨシズづくりを行っていたのみであった。

飯塚では、堀切とその隣の宝木塚から技術を学んだため、飯塚でつくるとしめ飾りの種類は、同様にかなり多くの種類のものを作っていた。飯塚がしめ飾りをつくり始めたころは、浅草の観音市で生産者個人がしめ飾りをお客に売ることができたため、飯塚の人も店を出し、集落内でしめ飾りの組合を作り、揃って出荷をするほど盛んに行われるようになった。

■**佐野のしめ飾りづくり** 足立区では佐野が新しい産地であり、昭和の初めころに始まったものだという。

当時、盛んにしめ飾りをつくっていた北三谷、普賢寺、葛飾区の上千葉、下千葉で品不足になったため、縁故関係から依頼されて作

り始めたという。佐野で作られたしめ飾りは、リンボウやダイコジメなどの小物であり、市への出荷も佐野の農家が行うのではなく、依頼してきた農家へ一度運んでいき、まとめて一緒に出荷するという方法をとっていた。

佐野でのしめ飾りづくりが盛んであったのは、昭和の初めから戦後までの二〇年くらいの間であった。その後も、二、三軒は続ける家があったが昭和六三(一九八八)年の年末に、昭和天皇の容態が悪くなり、しめ飾りの販売が危ぶまれたときを機会に廃業し、佐野でのしめ飾りづくりはなくなってしまった。

■**大谷田のしめ飾りづくり** 足立区大谷田でもしめ飾りづくりを行う家があったが、依頼によって作っており、自分では出荷しなかった。北三谷でも出荷先は葛飾区であると記録されている(『東京市域内農家の生活様式』昭和一〇年 帝国農会)

このように独自に出荷を行わないことは、佐野、大谷田、北三谷などが新しく補助的な産地であるということをよく表している。

■**新産地の発展の差** 佐野と同様に新しい産地である葛飾区の飯塚では、長くしめ飾りづくりが続けられていた。こうした差は、伝播



作るときは、足踏み式縄ない機やヨシズ機を用いて、中川の葦やリンボウ、ダイコジメなどの材料を用いてつくります。佐野では、昭和の初めころに新しい産地として発展し、大谷田や北三谷でも依頼によって作られるようになりました。

したしめ飾りの種類の違いにあると考えられる。飯塚は多くの種類を作っていた堀切から技術が伝わったので、玉飾り、ゴボウジメ、ダイコジメなど比較的多くの種類が作られるようになった。一方佐野は、リンボウやダイコジメといった小物で種類も少なく、産地としては弱小であった。そのため産地としては飯塚の方が重要になり、その後のしめ飾り作りの発展にも関係するものとなった。飯塚へのしめ飾りづくりを伝えた堀切や宝木塚が都市化などによりしめ飾りづくりをやめてしまったあとにも続けられた。つまり、技術を伝えるたもとの産地が廃れたあとも、伝播先の新しい産地が発展しているということになった。

■**伝播の図式** こうした図式は、明治の初めのころ、現在の荒川・墨田区域などにあった元来のしめ飾りづくりの産地から、足立・葛飾・江戸川といった現在の荒川以東へと産地が伝播するときも同様であったと考えられるのである。

伝播のきっかけは、血縁などの縁故関係によるものであり、初めはしめ飾りの作り手から、出荷の仕方まで面倒を見てもらったものが独立して行うようになった。旧産地の集落の家から新産地の家へ、そして地縁・血縁の強い集落の家々へと伝わっていった具合に広まり、伝播と分布を作ったというのである。

東京東部の稲作地帯内を伝播していたしめ飾りづくりであるが、こうした伝播の背景には、輸送技術が未発達であったということが大きな要因となっている。産地の

移り変わりとはいえず、大八車やリヤカーなどで、浅草の観音市への出荷ができる範囲のなかで起こっていることであった。

しかし、昭和四〇年以降の急激な都市化と、輸送手段の発達、さらに遠方へとしめ飾りの産地が移ることを可能とした。トラックなどによるしめ飾りの大量輸送、また、技術を持つ農家や仲買の行き来などの連絡手段も格段に発達した。つまり、近郊である必要性はなくなっていたのである。

■**東郊の専門化** 都市化などにより次第に減少する東京東郊のしめ飾り作りであったが、生産者が少なくなるにつれて専門化し、そして、一軒の家でさまざまな種類を作るようになっていった。あるいは、半分仲買のような役割を行うようにもなった。昭和六〇年代にはこの地域にも水田はなくなり、すでに農業からも離れ、生産は数えるほどになっていった。材料のミトラズは区外から調達して行っていた。技術は高いため、後進の産地より、品質のよいしめ飾りを作ることができ、また昭和五〇年代の終わりころには、好景気であったため、しめ飾りもよい値で売れたようである。

しかし、その後、さらに人件費が安い海外でのしめ飾りも輸入され、スーパーや百元均一などで非常に安価に販売されている。伝統的なしめ飾りの形にこだわらないようになくなってしまった現在、しめ飾りの生産や流通にかかわるものは大きく変貌している。

しめ飾りについては、これまでの生産物と同様に都市近郊の生産物という枠から外れるだけではなく、その「形・デザイン」また、しめ飾りを飾るといったこと自体までも変化をみせているのである。

——「しめ飾り」終わり (当館学芸員)

お知らせコーナー

特記を除きお問い合わせは郷土博物館(Tel 3620-9393)へ

郷土博物館収蔵資料展

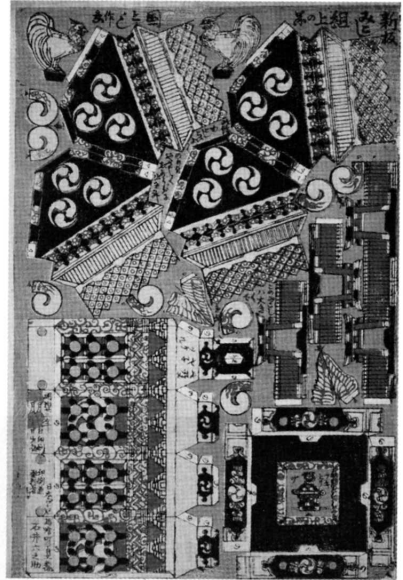
「まなんであそぶ」 オモシロウきよえ」

博物館の浮世絵コレクションのなかで、「おもちゃ絵」とよばれる作品を紹介します。おもちゃ絵は子ども遊び用につくられた浮世絵の一種で、びくし絵、組み上げ絵(立版古)、絵双六などさまざまな種類があります。これらの作品はただ鑑賞するだけでなく、実際に切り貼りしたり、学習教材として使用されました。むかしの子どもがあそんでまなんだおもちゃ絵の世界をお楽しみください。

▼会期 前期：4月27日(火)～6月13日(日)、後期：6月19日(土)～7月25日(日)、(前・後期で展示替えを行います) ▼会場 郷土博物館企画展示室

■関連イベント 体験教室「浮世絵ペーパークラフトを作ろう」 ▼開催日 5月15日(土)、6月19日(土)、7月17日(土) いずれも午後2～3時

▼定員 20名(当日先着順) ▼会場 郷土博物館1階子どもホール



上段 歌川国利「新版みこし組上の図」
下段 同完成写真

好評でした！ 1万人のお客様

リニューアル一周年 記念イベント

郷土博物館では、リニューアル一周年を記念して、3月6日から4月5日までの一ヶ月間さまざまなイベントを開催しました。

期間中の来館者数は、のべ1万0347人となりました。たくさんのお客さまがご来館くださいました。今後も楽しい博物館へ是非お越しくださいませ(左写真参照)。



あだち拓本研究会による拓本体験の様子

郷土芸能鑑賞会

▼日時 5月5日(こどもの日) 11時より ▼会場 中庭展示舞台(雨天時、講堂)
▼出演団体 大谷田隅田囃連中/押部文化保存会はやし連/葛西ばやし佐野保存会

博物館の映画会

5月8日(土曜日・無料公開日)に映画会を開催します。上映作品は次の通りです。
「神々の石から生まれる芸術―那智黒硯の製造過程―」那智黒石の特徴と自然な姿を生かした高級硯づくり(上映時間20分)
「技と心―紀州へら竿の製造過程―」和歌山県の伝統工芸品、和竿づくりのすべて(上映時間20分)

▼時間 午前11時から ▼会場 郷土博物館2階講堂

ゴールデンウィーク はくぶつかん子どもイベント

郷土博物館で子どもサポーターズが皆様のご来館をお待ちしています。時間はいずれも午後2時～3時。会場は郷土博物館1階子どもホールです。

▼4/29(昭和の日) はくぶつかんクイズ大決戦： はくぶつかんのいろんなクイズをだすよ。チャンピオンは君だ！

▼5/1(土) 布絵付け師「こいのぼりの巻」： みんなで博物館の中にこいのぼりをおよがそう

▼5/2(日) 郷土すごろく大会 …足立区

の郷土をすごろくで遊びながら体験しよう

▼5/3(憲法記念日) ショウブで「にほひ袋」をつくるよ … 足立の特産物で、携帯できる香り袋をみにつけよう

▼5/4(みどりの日) ジュズダマでお守り アクセサリー作り … 自然の数珠をつかってプレスレットなどをつくらう

▼5/5(こどもの日) 毛ばたき武士で大相撲 … 伝統おもちゃ「毛ばたき」をつかった相撲大会

国際博物館の日(5月18日・火)

▼郷土博物館は無料公開日になります。

二〇一〇年のテーマは「博物館と社会的調和」です。4月末から5月末までの一ヶ月間、全国の博物館でさまざまな催しが行われます。

芭蕉と千住宿を語る

おくのほそ道 芭蕉フォーラム
■基調講演 葉山修平(小説家・駒沢短期大学名誉教授)

■シンポジウム パネラー 葉山修平氏・三浦佐久子氏(作家・大衆文学研究会)・相川謹之助氏(足立史談会)ほか
▼日時 4月25日(日) 午後1～4時

▼会場 足立区生涯学習センター4階講堂 ▼申込み FAX(03・3868・3233) もしくはハガキ(宛先〒120・0037足立区千住河原町21・8・702 NPO法人 千住文化普及会)に住所・氏名・年齢・電話番号「芭蕉と千住宿を語る」と明記し申し込んでください。4月20日締め切り ▼入場料 500円 ▼定員 200名 ▼お問合せ 3850・9320(伊藤)まで